
青すぎる孤独

北加チヤ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

青すぎる孤独

【Nコード】

N4307D

【作者名】

北加チヤ

【あらすじ】

迷子になったまゆり。彼女の前に現れた“ちくはぐ”な男、シヨージ。孤独な二人が出会い、再生がはじまる。

逢魔

晴れすぎた空は 嫌い
青いあなたは 私を独りぼっちにする

まゆりが道に迷ったことに気が付いたのは、夕日が今にも沈みきろうとしている頃だった。世界が昼から夜に移り変わる瞬間、オレンジ色の太陽が落ちて周りの景色が暗い青色に変わる。まゆりの赤茶色の長い髪も、ブランド物のパールピンクのスーツもその空に染められる。

逢魔が時。

人々が家路につく頃。いつものまゆりなら、仕事場へ着いている時刻だ。

「ヤバイ。罰金?!」

携帯電話で時刻を確認すると、出勤時間まで10分とない。どう考えても遅刻する。まゆりはマネージャーに電話をかけようと携帯電話を開いて、画面に映し出された“圏外”の文字に目を見開いた。

「嘘、マジで?」

都会の中心部で電波の届かない場所があるということが、まゆりには信じられなかった。

「どっしょよ……」

こうなれば誰かに道を聞くしかない。まゆりは人が歩いていないか辺りを見渡した。そこは人通りの少ない住宅街だったが、今の時刻なら家に帰る途中の誰かと出会うかもしれない。まゆりはきよろきよろと辺りを見渡しながら歩いていった。静かな場所だ。人どころかのら猫一匹歩いていない。

ジジジと音をたてながら街頭が順番に青白い光を灯し始めたのを見て、まゆりは世界がすっかり夜になったのだと悟った。見上げれば、濃いネズミ色の空に冷たい月が浮かんでいる。今日は満月だ。丸い月を見つめながら、まゆりは小さく微笑んだ。

「え？」

そこでふと、まゆりは奇妙な事に気が付いた。もうすっかり暗くなっているのに、住宅街に建ち並ぶどの家も灯りをともししていない。それどころか、どの家も空き家であるかのように人の気配を感じないのだ。まゆりはぞつとして、慌てて近くの家の中をのぞき見た。

『松田』という表札のついたその家の庭には、三輪車と子供用のスコップが転がっていた。美しく手入れされた花壇があり、鉢植えの花もたくさん並んでいる。2階建ての家の中はカーテンがガードしていてのぞき見ることはできないが、蜘蛛の巣ひとつ張っていない綺麗な外観から人が手入れしている形跡を感じる。

なのに。それなのに、誰もいない。

「おかしい」

まゆりは寒気を感じた。怪奇現象とか都市伝説なんかが好きなお僚が、面白可笑しく話していた話を思い出す。

『満月の日に、誰もいない町とこっちの世界が繋がるんだってえ』

今日は満月だ。そしてここには、誰もいない。まゆりは恐ろしくなつて無我夢中で駆けだした。走っている方向が出口の方かどうかは分からない。もしかしたら迷宮の奥へとどんどん迷い込んで行っているのかもしれない。

だがまゆりは、立ち止まるのが怖かった。

*

どれくらい走つただろう。すっかり息が上がってしまったまゆりは、脇腹を押さえながらその場に崩れ落ちた。疲れてもう走れない。ピンヒールの靴で走つたために足が痛かった。まゆりはアスファルトに座り込んだまま右足の靴を脱ぐと、それを力一杯上に放り投げた。風を受けながらくるくと回るシルバーのミュール。それはしばらく宙を遊びながら舞うと、カランと音を立てて地面に落ちた。

「ありえないんですけど！」

誰に向けるでもない、けれど独り言にしては大きな声でまゆりは言った。すると、

「明日は、曇りだね」

まゆりの背後から、男の声が聞こえた。

「!?!」

緊張が走った。さっきまで人の気配など感じなかったのに、確かに今後ろに誰かがいる。まゆりは振り返ることもできず、呼吸を整えながらただじっとしていた。

「あゝした、あゝめになゝあれ」

男の声が独特の音程で、子供の頃よくやった天気占いの呪文を叫ぶ。それと同時にボロボロのスニーカーが宙を舞った。ゆっくりと回転しながら落ちていくグレーのスニーカー。空を舞う間に靴ひもがほどけて、白いひもがプロペラのように回った。スニーカーは暫く空を飛ぶとトンと軽い音を立ててて地面に落ちた。そして二、三度弾んで転がり綺麗に上を向いた。

「ありや、晴れか？ 嫌だなあ」

男のがっかりとした声。まゆりは驚きと恐怖で高鳴る心臓をおさえながら、なんとか勇気を振り絞って後ろを振り返った。

すると、そこには奇妙な……というよりも“ちくはぐ”な中年の男が立っていた。

(げ、何このおっさん……ヤバ系?)

まゆりはまじまじと男を見つめた。年は四十代半ばくらいだろうか。少し白髪のみじり始めた短い黒髪に、痩せこけた頬には無精ひ

げが生えている。シルバーの細縁フレームの眼鏡の向こうに覗く瞳はどこか寂しげで、目の下には黒いくまが寄っていた。どこにでもいるような、これと言って特徴のない顔立ち。顔だけ見れば普通に見えるかもしれない。だが男の着ている服を見れば、男が普通ではないと十人中九人は思うはずだ。

男は赤と緑のボーダーカットソーの上に、蛍光ピンクのジャージを羽織っていた。下は薄い青色の安物のジーパン。スニーカーの脱げた片足には黄色の靴下を履いていた。目がチカチカするような派手な衣服。そしてちぐはぐな取り合わせ。

まゆりは男を可笑しいと思うよりも、まず怖いと思った。だがその恐怖は、幽霊などという未知なる物への恐怖ではなかった。それは目の前の男が、どこかの精神病院から抜け出した異常者ではないかという現実的な恐怖。誰もいない世界にこの変な男と二人きりにされたという、訳の分からない恐怖だった。

「お嬢ちゃんも、迷ってしまったのかい？」

男が柔らかな笑みを浮かべながら尋ねた。

「おっさん、何者？」

まゆりは男の質問には答えず彼を睨み付けると、警戒しながら問い返した。自分は女で相手は男。もし目の前の男が何かしようとしていたら、力で勝てるはずがない。まゆりはいつでも逃げられるように身構えた。すると男は楽しそうに口の端を上げ、

「ショージだ」

と言った。どうやら“ショージ”というのが男の名前らしい。

(シヨージ……庄子？ 名字？ それとも下の名前？)

まゆりが首を傾げていると、シヨージは何も気にしない様子で微笑み、ケンケンしながらさつき投げたスニーカーの所まで行った。そして落ちているスニーカーを履き直すと、ほどけた靴ひもを丁寧に結ぶ。のらりくらりとした男の動作を、まゆりは不思議な気持ちで見つめていた。逃げるなら今がチャンスなのに、なぜか体が動かない。

シヨージは自分のすぐ近くに落ちていたまゆりのミュールを拾うと、彼女の所まで戻ってきてそれを差し出した。

「はい。これ」

にっこりと微笑むシヨージ。

「……ありがとう」

まゆりは戸惑いながら、軽く会釈した。座ったまま手渡されたミュールを履き直す。するとシヨージはどこか寂しそうにすっと目を細めた。

「お嬢ちゃん、名前は？」

「……まゆり」

答えてから、まゆりは男に対する警戒心が薄らいでいることに気が付いた。さつきまでの恐怖心もどこかへ行ってしまった。まゆりが男に対する奇妙な印象は消えないし、ここがどこなのかという疑問は残っている。だがなぜか、さつき一人きりでいた時よりも自分が安心していることにまゆりは驚いた。

(なんで? ありえないし)

まゆりはシヨージの視線から逃げるように俯いた。目の前の異常な男に心の内を悟られるのは嫌だった。するとシヨージはふうと大きなため息をついた。

「ここから出る方法を教えてあげるよ」

「え?」

まゆりは勢いよく顔をあげた。一瞬、男の灰色を帯びた瞳と目が合う。

「それにはまず、まゆりの事を聞かせてくれるかな?」

「あたしの……?」

まゆりは眉をひそめた。するとシヨージは優しく彼女の頭を撫でながら言った。

「誰を殺したんだい?」

まゆりは目を見開いた。

青すぎる孤独

灰 煙

だから私は シガレットの煙で
あなたを 汚そうと 今日も息を吐く

まゆりは真つ白なベッドの上にいる。

そこは狭い正方形の部屋。ベッドとサイドテーブル以外何も無い質素なつくり。少し大きめの窓にかけられたクリームイエローのカーテンがさらさらと風に揺れている。

そのカーテンを、カーテンの向こうの風景を、まゆりはぼんやりと見つめていた。カーテンの隙間から見える窓の外は、名の知らぬ樹木が青々と生い茂っている。

空は、雲一つない晴天。澄み切った青色だ。

外の景色の眩しさにまゆりは目を細める。すると、つんと消毒液の臭いが鼻についた。

「こんなもんなんだ……」

まゆりはぼつりと呟く。耳に響いてくる自分の声がいつもよりかすれていて、まゆりは喉がカラカラに渴いていることに気が付いた。彼女はそつと体を起こすと手を伸ばし、サイドテーブルの上に置かれた水差しを手に取った。まだ半分眠ったままの体を無理矢理叩き起こすと、プラスチックのコップに水を注ぐ。少し水をこぼしてしまい盆の上に水たまりができてしまったが、まゆりは気にせず一気にコップの水を飲み干した。のどが渴いている。コップ一杯の水なんかじゃ潤わないくらい、まゆりは渴ききっていた。

水差しの水を全て飲み干すと、まゆりはふうと息を吐いた。ベツトに横になり、そつと下腹部に手をあてる。昨日までそこにあつたものが無くなつたといわれても、実感が湧かない。生まれてくるはずの命を絶つたのに罪悪感もない。中絶なんて一瞬だよって誰かが言っていたが、本当にやってみればそんな痛みもないし簡単だ。まゆりはそう思った。

*

物心付いたときから、まゆりは太陽が照らすまぶしい世界より、月明かりの照らす薄暗い世界の方がずっと居心地が良かった。なぜなら昼間は行きたくもない学校へ行つて、友達と呼べるのかわからない学友達に愛嬌を振りまかなくてはならないし、家に帰つて来れば散らかつた部屋を片づけて、母親が起きてくる前に夕飯を作らなければならぬ。それにもし帰つてきたとき玄関に男物の靴が置かれていれば、雪の降る寒い日でも母親が仕事に行く時間まで家の近くの公園で時間をつぶさなければならぬ。まゆりにとって昼間は嫌なことばかりだった。特に苦痛だったのは、母親と顔を合わさなければならぬことだ。そして会うたびに母親に殴られることだった。

まゆりの家は母子家庭だ。まゆりの父親は彼女が生まれる前に事故でなくなつた。そのためまゆりの母親は19でシングルマザーになつた。

まゆりは世界で一番母親が嫌いだった。彼女の母親は夜の仕事を

して、着る物も化粧も派手だった。時々家に男を連れ込むし、酒癖が悪く、酔うといつもまゆりを殴った。家事をまゆりに押しつけて、まゆりが何かするたびに不満そうな顔をするのだった。

（あたしを、ストレス発散の道具としか思っていないんだ）

まゆりはそう思った。そして彼女はそんな母親を憎み、また心の底でその最低の母親に愛されたいと願っている自分を軽蔑していた。

「こんな親、死んでくれればいいのに」

まゆりは朝が来るたびに、そう思っていた。

光は全てを暴く。まゆりの心に巣くった醜い化け物を、どんなに拒否しても容赦なく見せつける。救いなどどこにもないのだと、まぶしい光でちっぽけな希望の光をかき消してしまう。光のさす鮮やかな世界は、まゆりには残酷すぎた。だからまゆりは少しずつ、転がるように闇へと落ちていった……底のない、深い深い闇の中へとするとひとりぼっちのまゆりを、闇は優しく迎え入れてくれたのだった。

それはまゆりが14歳、中学3年の夏だった。

闇。そこは暗くジメジメとして嫌な臭いのするところ。けれどいつも、笑い声の絶えないところ。色とりどりのネオンが煌めき、ひとりぼっちの人達の群が闊歩する賑やかなところ。絶望しか知らなかったまゆりには、その世界は昼の世界よりずっと美しく見えた。たとえ仮初めでも、自分と同じような思いで光の世界から逃げてきた人間達と友達になれる。まゆりを殴ったり罵るのではなく、優しく撫でて『かわいいね』と言ってくれる人がいる。例えばその人間が腹の底で別のことを考えていようと、そんな言葉を聞いたことのない

いまゆりにはとても嬉しかった。

けれどまゆりはだんだんと、闇の世界が与えてくれる『幸せ』に満足できなくなっていた。大人達が美味しいと言って飲んでいるお酒は、まゆりにはちっとも美味しくなかったし、誰かが気分が楽になると勧めたたばこも、ただ苦く煙臭いだけで心を晴れやかになどしてくれなかった。寂しさを埋めるように男に抱かれても、通り過ぎるだけの男達はまゆりに愛情など与えてはくれなかった。彼らを与えてくれるのはままごとのような愛の言葉と、一瞬の夢物語。共に快樂の海に溺れても、一緒に泳いではくれない。いつもまゆりは一人岸边にたどり着いて、そのたびに一人で泣いた。はらはらと流れる涙。はじめは真珠のように美しかった涙は、次第に濁り輝きを無くし、最後には枯れてなくなった。

後に残ったのは干からびた心だけ。どんなに水を注いでも潤うことのない、寂しさだけだった。

そうして埋められない孤独を抱えたまま、まゆりは18歳になった。母親の元を飛び出して4年、知り合いの家を転々とする生活を卒業し、まゆりは男と暮らすようになった。

その男は、まゆりより10歳以上も年上だった。詐欺まがいの仕事をしていた、たくさんの女を困っている。鴨川かもがわという男だ。

まゆりは鴨川の下の名前を知らない。鴨川もまゆりの名字を知らない。お互いに相手に対して必要以上に詮索したり束縛しない。一緒に暮らしてはいるが、二人を恋人同士と呼ぶことはできなかった。二人の間に『愛情』など存在しなかったのだ。

だから鴨川がこう言ったとき、まゆりはさほど驚かなかった。

「墮ろせよ」

子供ができたと伝えたとき、鴨川はためらいもせずまゆりに中絶するように言った。彼は携帯電話を片手に、いつものようにキヤ

ビン・マイルドの煙を燻らせていた。

「何？ まさか、産みたいとか言うんじゃないやねえよな？」

「まさか！」

まゆりは吐き捨てるように言った。まだ18なのに子供を産んで子育てに振り回されるのは嫌だった。それに父親は目の前にいる軽薄な男。職も安定せず、他に女がたくさんいる。もし結婚などすれば自分が苦勞することは目に見えていた。まゆりが鴨川に妊娠のことを伝えたのは、中絶するためのお金がいるからだ。まゆりは健康保険証を持っていない。そして未成年だ。鴨川の協力なしでは中絶することができない。まゆりは決して「産んで欲しい」と言われることを期待した訳じゃない。そう、まゆりは子供なんて欲しくなかった。

すると鴨川はくっくと面白そうに笑って言った。

「そつだ。お前の客に篠山しのやまいたろ？ 代議士の。あいつのどこ行ってさー、子供できたって言うてみ？ 墮ろしてやるから慰謝料よこせつつてさ。そしたら、たっぷりふんだくれるぜ」

その言葉にまゆりは驚いた。最低の男だとは分かっていた。だがまゆりの妊娠も金儲けに利用しようとするとは信じられなかった。

まゆりは露骨に嫌そうな顔をする、

「篠山？ 駄目だよ、あのおっさん。あたし寝てないもん」

とわざと悪女っぽくそうに言った。そうするほうが鴨川が喜ぶことをまゆりは知っていた。

すると案の定鴨川は嬉しそうに微笑むと、携帯電話をテーブルに

置いて、空いたその手でまゆりを引き寄せた。そしてまゆりの赤い唇に、噛みつくようにキスをした。

「！」

男の舌から伝わる煙草の味。まゆりは鴨川に分らないように顔を歪めた。まゆりは煙草が嫌いだ。煙草臭いこの部屋も、今キスをしているこの男も本当は嫌いだ。だがまゆりは鴨川に世話になっている。14で家出して居場所のなかったまゆりを拾って、仕事を与えてくれたのは鴨川だった。もちろんまゆりは未成年を夜の店で働かせるのが違法だというのは知っていた。だがまゆりはどうしても家に戻りたくなかったのだ。家に戻るくらいなら死んでもいい、そう思っていた。

まゆりがもう知り合いの家を転々とする生活も限界だと感じた時に、鴨川と一緒に暮らすことを提案した。仕事も前より良い所を紹介するし、身の回りの世話をしてくれれば駄賃もやる。そう言われて、まゆりは鴨川と住むことを決めた。それにその時のまゆりにはもう、鴨川の家しか行く場所がなかったのだ。そうしていつしか求められるままに、まゆりは鴨川に体をゆだねてしまった。

鴨川はまゆりの唇をしばらく弄ぶと、顔はずしてまゆりの瞳をのぞき込んだ。男の整った顔。何人もの女を騙しても心が痛まない詐欺師の冷たい瞳。まゆりは吸い込まれそうになるその闇色の瞳を、じっと見つめ返した。すると、

「何お前、俺に惚れてたの？」

ふざけた口調で鴨川が尋ねた。まゆりは彼を睨み付けると、

「ふざけんな！」

と言つて鴨川から体を離した。

時々鴨川はこうして『俺に惚れたか』と聞いてくる。それはまゆりが鴨川に依存しているかどうか確かめるためだ。もしまゆりが鴨川に『惚れ』たなら、彼はまゆりをこの家から追い出そうと思つてゐる。馴れ合うのが嫌い、束縛されたり、依存されるのが嫌い。そして何より『愛情』というものを信じていない。それが鴨川という男なのだ。

まゆりが呼吸を整え少し乱れた髪を直していると、鴨川は長い前髪をかき上げ、突然笑い出した。

「くくく、お前やらせねーで、あんなに貢がせてたのかよ。怖えーなあ。俺にもお前のその才能、分けて」

膝を叩きながら大笑いしている鴨川。まゆりは彼を冷やかな目で見つめていた。

「なあ……」

「何？」

「それ、本当に俺の子？」

鴨川の言葉に、まゆりは耳を疑った。そこまで言うとはさすがに信じられなかったのだ。するとまゆりの気持ちをよそに、鴨川は「うそうそ、冗談だってー」と笑いながら言つと煙草を燻らせた。

（最低な男！　こんな男の子供、産みたいと思つわけないじゃん）

まゆりは鴨川の煙草から立ち上る灰色の煙を睨み付けた。ヤニで部屋が汚れるから家の中では吸うなと言つた時、鴨川はまったく聞

くそぶりを見せなかった。そのために白かったはずの天井はすっかり黄ばんでいる。

（あの天井と同じ。すすけちゃったあたしは、どんなにしたって元に戻らないんだ）

まゆりは、闇に落ちてしまった自分を後悔していた。

*

「ねえ？　なんで？　子供墮ろしてる子なんていっぱいじゃん？　なのに、あたしだけ人殺しって言われなきゃないの？」

まゆりはショージに詰め寄った。納得できなかった。訳の分からない世界に迷い込んで、奇妙な人物に断罪される。そんなこと、まゆりに理解できるはずがない。

するとショージは小さい子供をなだめすかせるように言った。

「私は別に……まゆりを人殺しだなんて言っていない」

「言ったじゃん、誰をころしたんだって……！」

まゆりは怒っていた。その理由は彼女自身からない。もしかしたら頭の中が混乱していてショージに八つ当たりしてしまっただけ

かもしれない。

「まあ、少し落ち着いて」

シヨージがまゆりの背中をさすると、彼女は勢いよくその手を振り払った。

「触んな！ この、変態！」

まゆりはシヨージを睨み付けた。

「変態つて……ひどいなあ」

シヨージはしょんぼりして顔を伏せた。頭のとっぺんが少し薄くなっている。まゆりはシヨージの間抜けな姿を見たら、余計イライラした。

「大体、ここどこなのよ！？ あんた……シヨージ？ つていつたっけ？ 出口教えてくれるんでしょ？ さつさと教えてよ！」

まゆりが高圧的にそう言うと、シヨージは大きなため息を付いた。彼は真つ黒な空を見上げ、月が出ているのを確認すると何事かを呟き、またまゆりに向き直った。

「まだ駄目だ。まゆりがちゃんと教えてくれないと……君をここに引き留めているのが誰なのか分からないと、いつまでもここから出られない」

「引き留めるって、どういふこと？」

まゆりは眉をひそめた。怖いのが可笑しいのか……全く訳が分からない目の前の男。彼が何者なのかは分からないが、まゆりをここから出してくれるというのは本当らしい。

まゆりはじつと、シヨージが答えを返してくれるのを待った。すると、

「ここは通り道なんだ」

とシヨージが言った。

「通り道……?」

「あの世とこの世。死んだ人間があんたの世へ行くための通り道」

「え? 何言ってるの……」

まゆりの心臓がどんと跳ねた。シヨージの灰みがかった瞳が静かに揺れる。

「たまに、死んだ人間が意地悪してあの世へ行く道を塞いでしまったりするんだ。そうすると、あの世へ行けるはずの魂はいつまでもここを彷徨う。もしくは」

「何いってるの、やっぱりあんた、頭変なんでしょ?」

まゆりはつばを飲み込んだ。

「ねえ、まゆり、君は……」

シヨージが何か言いかけたとき、

「だって……」

まゆりは頭の中に雷が落ちたかのような強い衝撃を受けた。
強い光の中に映る、いくつかの場面。

「あたし、あの時……」

忘れていた記憶が、鮮明に蘇る。まゆりはもう一度その時を体験した。

覚えているのは車のブレーキ音と、誰かがまゆりを呼ぶ声。
自分の体から温かな物が溢れて、流れる感覚。

血の赤。

そして……

開いた眼に映った空の青。

高く、手を伸ばしても届かない……晴れ渡る空の青。

まゆりは自分に何が起こったのかを思い出した。

青空

そして煙を 雨雲にかえて
涙を雨に 嘆きを雷にかえる

病院のベットの上でまゆりがぼんやりしていると、誰かが扉をノックした。

「はい」

まゆりが返事をする、静かに扉が開いて一人の女性が姿を現した。雪那ゆきなという名前の、まゆりの同僚だ。もちろん“雪那”というのは源氏名。まゆりは雪那の本当の名前を知らない。まゆりより1つ下の17歳で、年を偽って仕事をしているということぐらいしか、まゆりは知らない。

雪那は栗色の髪の毛をゆるめにカールさせた今流行のヘアースタイルをしている。日本人離れた彫りの深い顔立ち。彼女はクォーターだ。美しい容姿だけでなく、スタイルが良いため、店での人気はナンバーワンだ。

「ゆきちゃん、来てくれたんだ……」

雪那はまゆりとは仲が良い方だ。まゆりの勤めている『ペイル』という店には同世代の女性が20人近く勤めているが、まゆりが話をするのは雪那くらいだ。まゆりは人付き合いが得意な方ではない。それに、鴨川と一緒に暮らしていることで同僚の何人かから妬まれ

てもいた。その店にはまゆりの他にも何人か、鴨川の女がいたのだ。雪那は部屋の中に入ると、ベットの脇に置かれた丸椅子に腰をかけた。

「気分はどう？」

雪那のソプラノ声を久しぶりに聞いたような気がして、まゆりは微笑んだ。

「別に。なんかけっこーあつと言う間で、拍子抜けしたってどうか」

まゆりがそういうと、雪那はくすりと笑った。

「まゆちゃんらしいね」

そういうと、雪那は悲しそうに顔を伏せた。

「わたしは……けっこーへこんじゃったけど」

雪那は16の時に子供を墮ろしている。といっても、まゆりのように望んで中絶したのではない。子宮外妊娠だった。雪那がとても辛そうに当時のことを話したのを、まゆりは覚えている。それが理由で結局雪那は当時つき合っていた彼氏と別れることになった。それからというもの、雪那は仕事一筋で頑張ってきた。そして店のナンバーワンにまで上り詰めたのだ。

「どうしたの？ ゆきちゃん。今日、仕事じゃないの？」

まゆりは雪那の様子がいつもと違うことに気が付いた。それはまゆりが子供を墮ろしたからだけではないようだ。するとふいに雪那

が顔を上げた。すこしためらいがちに視線を宙に漂わせると、意を決してまゆりに目を合わせた。

「まゆちゃん、あのね。まゆちゃんのお母さんが来てるの」

「え？」

まゆりは一瞬、雪那が何を言っているのか分からなかった。

（お母さん……？ あたしの、母親？）

まゆりが冗談だと思って雪那の様子をうかがうと、彼女は真面目な顔でじつとまゆりを見つめていた。

（うそ、まさか？）

まゆりが何か言おうと口を開きかけたとき、ゆっくりと扉が開いた。

「まゆり……」

聞き覚えのある声と同時に、一人の女性が現れた。

（う、そ……）

4年会っていなかった。たった4年会っていなかったのに、母親の顔が10年分くらい老け込んでいて、まゆりは驚いた。

（し、知らない……こんな人、知らない）

まゆりはその女性が自分の母親だとは信じられなかった。まゆり

の記憶の中の母親は、もつと美しくてピリピリとした空気をまとっていて、もつとずつと大きくて強かった。なのに今まゆりの目の前にいる人物は、白髪交じりの髪は乱れ艶もなく、唇はひび割れている。今にも崩れ落ちそうな弱々しい雰囲気、体もまゆりより小さくちよつとつついたら壊れてしまいそうだ。とても自分の子供を殴り罵っていた母親と同一人物だとは思えなかった。

それに女性は泣いていた。ぼろぼろとだらしなく涙を流しながら、ベッドの縁に手を付いて泣いていた。何度も「ごめんなさい、許して」と呟きながら泣き崩れていた。

まゆりは一度だつて母親が泣くところを見たことはなかった。テレビで感動的な場面があつても全く反応を示さなかった母親。まゆりの成績表を見ても、まゆりがいじめられて怪我をして帰つても何の反応も示さなかった母親。まゆりにとつての母親はそういう人だった。決して目の前の感動の再会シーンを演じている人物ではない。まゆりは戸惑っていた。

すると、雪那が徐に立ち上がった。

「わたし、もう行かなきゃ。二人で話してね」

にっこりと微笑む雪那。

「待つて！」

立ち去ろうとした雪那を、まゆりは腕を引いて止めた。雪那が行かなければならないのは分かつていたが、まゆりはこの母親と二人きりにされるのが嫌だった。もしかしたら雪那がいなくなった途端、態度が豹変するかもしれない。泣いているのも謝っているのも全て演技で、まゆりに会いに来たのはお金をせびるためかもしれない。色々な想像がまゆりの頭を駆けめぐった。

まゆりは母親が改心したなど信じられなかったのだ。

「まゆちゃん。お母さんの話、聞いてあげて……ずっと探してたんだって、まゆちゃんのことずっと探して……」

「うそ！ だったら4年も……おかしいじゃん」

まゆりが首を振ると、雪那は彼女の両肩を掴んだ。雪那の必死な形相に、まゆりは怯んだ。

「聞いて！ 鴨川さんが……鴨川さんがまゆちゃんの居所が分からないようにしてたの。まゆちゃんがいなくなると困るから。お金のために……まゆちゃん知ってた？ まゆちゃんのお給料ね、毎月天引きされてたんだよ？ 稼ぎが良くなったらまゆちゃんが独り立ちしちゃうからって。ずっとまゆちゃんを騙して……子供墮ろさせたのだから、もっとまゆちゃんを働かせる為なの！ あの人の、悪魔だよ……しんじらんない……」

まゆりは一瞬、何を言われたのか理解できなかった。鴨川が悪い男だというのは分かっていた。自分が利用されているのも、まゆりは分かっていた。けれど雪那が言うようなことを平気でするくらいあの男が腐っているとは、まゆりは信じられなかった。そしてその男の子供を身ごもり、望み通りに中絶した自分が許せなかった。

「うっ」

まゆりは急に吐き気を感じて手を口にあてた。

(しんじらんない……)

吐き出そうにも胃の中は空っぽで、まゆりは少し咳き込んだだけ

だった。たらりと透明な唾液が口の端からこぼれ、顎を伝う。こんな時泣ければどんなにいいかと、まゆりは思った。

(死んじやいたい……)

幾度そう思ったか知れない。けれどこの時のまゆりほど本気でそう思ったことはないだろう。

「わたし、あの店辞めるの。『サファイア・ルーデイ』のオーナーが来ないかって言ってくれてるから、そこに行くつもり。ねえ、まゆちゃん。もしよかったらまゆちゃんも一緒に働かない？ それとも、もうこんな仕事辞めるか……お母さんとよく話し合って決めて」

雪那はそういうと、部屋を出て言った。

(ゆきちゃん……)

その時まゆりは子供を中絶して辛い思いをした雪那が、まゆりの中絶に反対しなかった本当の理由を知ったような気がした。雪那はただの同僚としてでなく、本当の友達としてまゆりのことを心配してくれていたのだ。まゆりのために、鴨川から離れて欲しいと思っていたのだ。だからこそ、まゆりと母親を会わせたのだ。

「まゆり、また一緒に暮らそう？」

弱々しい女の声。まゆりはゆっくりと視線を声の方に向けると、母親を見つめた。

「私が悪かったの。ごめんなさい、こんな辛い思いさせて……何の力にもなれなくて」

泣きながら謝り続ける母親。

「帰って」

まゆりは冷たい声でそういった。みじめだった。みじめな自分が許せなくて、そんな自分をすっかり弱々しくなった母親に見られるのが嫌だった。

「ごめんなさい、でもお願い。もう一度、チャンスを頂戴？」

泣きすぎる母親を、

「うるさい！ 帰って！」

まゆりは怒鳴りつけた。胸の中からどす黒い感情が迫り上がってくる。母親が弱々しい態度を見せるほど、まゆりの中の怒りは大きくなっていった。

（あんたのせいよ……あたしが、こんななのは、あんたのせいじゃない）

気が付けば。

まゆりは母親の頬を平手打ちしていた。叩いた手の平がジンと痺れる。母親は一瞬驚き、けれども反撃などせずさらに頭を深く下げて謝り続けた。

「ごめんなさい、ごめんなさい……わたしが悪いの、わたしが悪いの」

（そうよ、これは当然の報い）

その瞬間、ずっと眠っていたまゆりの中の化け物が目を覚ました。

「まゆり、許して、まゆり……」

謝り続ける母親を、まゆりは何度も罵りながら殴った。

バリーンと、水差しが割れる音でまゆりは我に返った。気が付けば、母親はぐったりと倒れたまま動かない。まゆりの手の平からは血が流れていた。水差しを割ったときに指を切ってしまったのだらう。

まゆりは割れたガラス片を拾おうとして、そこに映った自分の姿に驚いた。目がつり上がり、髪が乱れた女の顔。それはまゆりが何度も恐怖したあの母親の姿にそっくりだった。

まゆりをいつも殴り、罵り、ぼろ雑巾のようにうちすてた母親。その母親と同じ事を、今度は自分がその母親にしたのかと思うとまゆりはぞっとした。

「ねえ、生きてる？」

まゆりは母親に呼びかけた。今まで感じたことのない罪悪感がわき起こってくる。

「……」

けれど、母親から返事は帰ってこなかった。

「本当に、死んじゃったの？ あたし……人、殺しちゃった？」

まゆりは急に怖くなった。殺人犯がどんな一生を送るか。まゆりはドラマのワンシーンを思い出して青ざめた。

「逃げなきゃ……」

とつさにまゆりはそう思った。早くしないと病院の人間に気付かれてしまう。まゆりは急いで荷物をまとめると、簡単に着替えを済ませて部屋を飛び出した。

「ヤバイって、ほんっと、どうしょ」

どこへ行けばいいのかなど分からなかった。とにかく遠くへ行かなければならない、そう思った。まゆりはタクシーを拾おうと大通りへ向かった。大通りへ繋がる交差点で、信号が青になるのをイライラしながら待つ。

（あたし、どうすればいい？）

鴨川に頼ることもできない。代議士の篠山は、もしかしたら力になってくれるかもしれない。けれどまゆりが鴨川の子供を墮落したことがばれたら、篠山は力になってくれないだろう。雪那は……雪那には迷惑をかけられない。

まゆりの思考回路はパンク寸前だった。

「あー！」

考え込んでいるうちに、信号が青い点滅に変わっている。まゆり

は急いで横断歩道を渡った。その時、

キキーン

黒い乗用車が、まゆりめがけて突っ込んできた。

高速回転したタイヤがアスファルトを擦る悲鳴にも似た音を聞いたと思った瞬間、まゆりは空高く跳ね上げられていた。

ずっとあこがれて、手が届かないと絶望したあの空に。

次の瞬間、ゴトリと体が地面に叩き付けられる不快な音が聞こえた。そして遠のく意識の向こうで誰かが、

「まゆり！」

と名前を呼ぶのを、確かにまゆりは聞いていた。

(しんじらない……)

仰向けに倒れたまゆりの瞳に、まぶしすぎるくらい綺麗な青が飛び込んできた。

それは、よく晴れた空の青。都会の淀んだ空気では滅多に見られない、澄み切った青だった。

(うそ……?)

かすれ行く意識の中で、まゆりは自分の目から涙がこぼれ落ちるのに気が付いた。もう枯れ果てたと思った涙が、ゆっくりと頬を伝う。

(お母さん……)

まゆりは今まで生きてきた中で一番の、さみしさを感じていた。

*

「あんたの言うとおり、あたし……人殺しよ」

まゆりはそういうと、顔を伏せた。泣きたくても涙が出ない。まゆりは顔を両手で覆うと、そのまま押し黙った。

「分かったよ。まゆりをここに引き留めているのは君のお母さんだ」

ショージは空を見上げながら言った。満月だったはずの月が、いつの間にか三日月に変わっている。空の色も少しずつ明るくなり始めていた。

「あたしお母さんをころした……だから、ここに閉じこめられたんだ」

まゆりはそう言う顔を上げた。まゆりの目にも三日月が映る。満月よりも温かな光がまゆりとショージを照らす。

「違う。そうじゃない。まゆりをここに引き留めているのは確かにお母さんだけど、君はお母さんを殺してなんかいないよ」

ショージはそういうと、まゆりの手を引っ張って立たせた。

「行こう。まゆりに見せたいものがある」

にっこりと微笑むショージ。彼の手が思っていたより暖かくて、まゆりは驚いた。

(男の手って、もっと冷たいものだと思ってた……)

胸の中がほんわりと暖かくなる。今まで感じたことのない感覚にまゆりは戸惑った。

(お父さんって、こんな感じなのかな?)

「ここを出よう」

ショージがそう言った途端、まゆりの目の前の景色がぐにゃりと歪んだ。

青空（後書き）

感想で指摘いただいた「男の手って冷たい…」の部分ですが、今までまゆりが会ってきた男達とショージの手のぬくもりは全くちがくて、「優しい」の意味を持った「温かい」手であると表現したかったのです。異性の手ではなく父性を持った手…ショージ自身の手の体温も温かいという意味も含んでいますので、わかりにくかったかも…いえ、表現しきれってないです。すみません（汗）私の文章力がないために混乱を招きましたことをお詫びいたします。感想ご指摘いただきました方、ありがとうございます。

帰路

私の体は からっぽにかえて
あなたを泳ぐ 風になる

いつの間にか、まゆりの目の前にはベッドの前で泣きじゃくる母親の姿があった。

病院の一室で、頭やら顔やら包帯だらけの母親が、ベットに横たわっている患者の手をしっかりと握りながら泣いている。まゆりが後ろに居るのに母親は全く気が付かない。彼女の目はベットの上の患者にだけそそがれている。

その患者はまゆりだ。眠ったまま動かないまゆりには無数の管が繋がれ、頭は包帯でぐるぐる巻きで、両足と左腕はギブスで固定されていた。死にかけ、意識不明の重体、という言葉がまゆりの頭をよぎった。

「どづいこと?」

まゆりが傍らのショージに尋ねると、彼は言った。

「君はまだ死んでない。いや、正確に言うとまゆりの体は死んでないと言っべきか」

「それって、つまり……」

「君は生き返るんだ」

まゆりは息をのんだ。生き返る。それはまたあの苦しい世界へ戻ると言うことだ。母親を殺していなかったのには安心したが、まゆりが今までしてきたことは消えない。生き返ったとして幸せになれる保証もない。まゆりはショージの言葉をあまり喜べなかった。すると彼はふうと息を吐くと、

「これを見るんだ」

と言って、まゆりの目を泣いている母親に向けさせた。

「まゆりは死んでは駄目だ。君が死んだら……この人は本当に独りぼっちになってしまう」

ショージはそういうとまゆりの母親の肩に手を置いた。けれど、母親はショージの姿が見えていないのか彼の存在に全く気が付かない。彼女は涙と鼻水で汚れた顔をタオルで拭くと、突然独り言を語りだした。

それはまゆりの母親の、懺悔だった。

「まゆり、あなたの言うとおり。私は最低の母親で、死んで当然のクズ。だけどもゆり、お願いだから産んでくれなきゃ良かったなんて、二度と言わないで頂戴」

母親はやさしく、まゆりの頬を撫でた。

「私はまゆり、あなたが生まれたときどんなに嬉しかったか知れない。もう一人じゃないんだって、嬉しくて嬉しくて……絶対にあなたを幸せにするって誓ったの」

母親は語った。ずっとまゆりに言えなかった「ごめんなさい」と「ありがとう」の気持ち。

まゆりの母親は望んでシングルマザーになったわけではない。恋人であったまゆりの父親を事故でなくし、結果的にそうなってしまった不幸な人だった。

まゆりの母親に両親はいなかった。彼女は小さい頃に両親を亡くし施設で育った。いつも独りぼっち、そう思い続けていた彼女が初めて出会った孤独を埋めてくれる存在。それがまゆりの父親だった。

「これでもう寂しくない、幸せになれるそう思った矢先だった。彼は事故であっけなくこの世を去った。そして私はまた独りぼっちに……絶望して死のうかと思った。けれど、お腹の中にあなたがいることを知ったの。私とあの人の子供……とてもうれしかった。どんなことがあっても産みたい。そう思ったの」

けれど、彼女はまゆりを産んですぐ体調を崩してしまった。そのためしばらく働くこともできず、借金をしてしまった。子育てには想像以上にお金がかかる。そのことを彼女がしたのは、その借金が5倍近くに膨らんでしまった頃だった。

「お金を稼ぐために夜の仕事についたけれど、慣れない仕事でストレスは溜まる一方。新しく恋人ができて、子供がいると分かるとすぐにいなくなる。誰も助けしてくれない。仕事と子育てで、私は疲れ切ってしまった」

そして、まゆりが大きくなるに連れて彼女は自分がまゆりに見下されているという妄想にとりつかれるようになった。まゆりにいつ

も詰られている、そう思うようになった。

「まゆりをはじめて殴ったとき、生きていくのが辛くなったわ。このまま二人で心中しようかと本気で思った。けれどその度に、まゆりの顔を見るたびに思いとどまったの。どんなことをしたって、まゆりを育ててやる。じゃないと、あの人に申し訳ないって」

母親はそういうと、真っ赤になった目から涙をこぼした。

「わたし、ひとりぼっちになるのが嫌だったの……」

彼女はまゆりを殴るたびに罪悪感を感じていた。けれどそれはだんだん麻痺していき、考えることができなくなった。いけない駄目だと分かっているのに、悪魔にとりつかれたかのようにまゆりを罵った。本当はそんなことちとも思っていないかったのに、「お前のせいで私は不幸なんだ」とまゆりを責めた。

そして、限界を感じ始めた彼女はまゆりが中学に入った頃から、精神病院に通いはじめた。

「あなたが出ていった時、はじめはこのほうがいいんだと思ったの。私はまゆりを傷つけてばかりいる。だから、私の側にいないほうがまゆりのためだって……だけど」

まゆりがいなくなってから、彼女は心配で毎日眠ることができなかった。どこでどうしているのか、健康でいるのか、泣いていないか、悪い人間に騙されて酷いことをされていないか、心配でしようがなかった。

そしてまゆりがいなくなった途端、彼女は体調を崩してしまった。ひとりぼっちで眠る部屋の寂しさ、誰も助けてくれない苦しさ、一

人では思うように体が動かない自分。彼女は自分の弱さを痛感するたびに、まゆりが恋しくて仕方なかった。

そして彼女はまゆりをなくしてやっと、あんなに殴り罵倒した子供こそが、自分が生きるための支えだったと気が付いた。

「今更だつて分かつてる。都合のいい話だつて、わかかつてる。でも、お願い……私の所に戻ってこなくなつていいから、お願い。まゆり……生きて頂戴」

そついつと母親は、その場に崩れ落ちた。

「お母さん！」

まゆりは慌てて母親の元へ駆け寄つた。そして、そつと抱き起す。

「大丈夫、気を失つてるだけだよ」

ショージの言葉に、まゆりはほつと胸をなでおろした。

まゆりはそつと母親の髪に触れた。子供頃あこがれた美しい髪は面影もなく、生气に満ちていた顔は死人のように青ざめている。腕も体も細くやせていて、とても美しいとは言えない。なのにどうしてか、まゆりには今のこの母親ほど美しい物はこの世にないような気がした。

（お母さん……お母さんのほづがずつと……）

まゆりは闇に逃げた自分を後悔した。まゆりはちゃんと母親と向き合わず、彼女の怒声の裏側にある『たすけて』に気が付かなかった。そのせいで弱い母親をさらに追いつめた。そしてまゆりは一番言っではいけない言葉を彼女に言った。

「なんで、あたしを産んだのよ！」

と。まゆりは誰よりも自分の誕生を喜んでくれた人を深く傷つけてしまったのだ。

まゆりはそつと下腹部に手をあてた。

（あたしには、できなかつた。あたしは怖くて、全部から逃げただけ）

まゆりはこの時初めて、中絶した自分の子供に心の中で謝った。そして、『中絶なんて一瞬で終わる』なんて言葉は嘘だと思った。まゆりはこれから一生、この奪い取った命に謝り続けなければならぬのだ。まゆりの母親が何度も「ごめんなさい」と言い続けたように、どんなに罵倒されてもずっと許して貰えるまで謝り続けなければならぬのだ。

（ごめんなさい。母親になれなくて、ごめんなさい……）

すると不思議なことに、乾ききつたはずのまゆりから涙が流れた。ぼろぼろと止めどなく、まゆりの大きな目から美しい涙がこぼれ落ちた。

「シヨージ、あたし……」

「生きたいんだろう？」

まゆりはこくと頷いた。まゆりが死んでしまつたら、母親の救いはなくなってしまう。こんなに一生懸命謝っている母親は、まゆりが生き返らなければ一生許されることはないのだ。

少し前のまゆりだったら、母親を救いたいなどと思わなかつただろう。だがあの涙がこぼれたとき、まゆりの中から母親への憎しみも一緒にこぼれ落ちてしまったのだ。だから今のまゆりには母親への愛しさしか残っていない。

「あたし、やりなおしたい」

まゆりがそういうと、ショージは嬉しそうにっこり微笑んで、

「お帰り、まゆり」

と言った。

*

気が付くと、まゆりは白いベットの上に寝かされていた。体に力が入らない。そつと目だけ動かして自分の体の様子を見ると、両足と左手はギブスで固定されていた。

そして、右手は。

(お母さん……)

母親がしっかりと握ったまま、眠っていた。まゆりは小さく微笑むと、

「ありがとう……」

と呟いた。機械の音がうるさくて母親には聞こえないだろう、まゆりはそう思っていた。だがその途端、

「まゆり!?!」

母親が飛び起きた。驚いて目を丸くし、何度も瞬きをしている。まゆりはにっこりと微笑むと、何も言わずにこくりと頷いた。

(ただいま……)

長い間怖い夢を見ていたけれど、今やっと目が醒めた。まゆりはそう思った。

願詩

月は消え、空は青を取り戻し、燃える太陽がその町を照らす。
静かな、誰もいない町。その町の公園で、ベンチに一人の男が座
って影を見つめていた。

「行ったか……」

彼は蛍光ピンクのジャージのポケットに手を突っ込むと、煙草を
探した。だが箱を取りだしてみれば中は空っぽで、そういえば禁煙
してたのだと彼はぼんやりと思い出した。

「君ももう、行きなさい」

何も無い空間に声をかける。するとそこに、白っぽい光の玉が突
然現れた。ふわふわと浮かぶ光る玉。それは丁度シャボン玉みたい
な真ん中が空洞の物体だ。

「君のお母さんは、帰ったよ。だから、安心してあちらへ行くとい
い」

彼がそういうと、光る玉は上下に揺れた。

「シヨージ」

光る玉がそう彼の名を呼んだ気がして、一瞬彼は驚いた。それは
産まれることのなかった魂だ。人の言葉を話せるはずもない。

（でも、この小さな命は、まゆりがこの町にとどまっているように

あの世への道を塞いでいた。一度も愛情を注がれなかった、ましてや自分の命を奪った母親を、死なせないようにしていた……心があるといふことは言葉を伝えることもできるのかもしれない)

シヨージは半信半疑な気持ちで、光る玉に話しかけた。

「なんで、君はここにとどまってるんだい？」

すると、

「シヨージ」

また光の玉が言った。

「まさか、私のため？」

シヨージが尋ねると、光の玉は上下に揺れた。どうやら「YES」という意味らしい。シヨージはため息を付くと、

「君が私の孤独を埋めてくれるのかい？」

と尋ねた。すると、光る玉は左右に揺れた。「NO」だ。

「じゃあどうして？　ここはとどまる所じゃないんだ。通り過ぎるだけの所だよ」

シヨージがそういうと、光る玉はぐにやぐにやと八の字を描いて飛んだ。するとその途端、真っ白に光る道がシヨージの目の前に現れた。

「私に、生きると……そういうのかい？」

光る玉は上下に揺れた。

「人間にもなっていないのに、なんておせっかいな魂だ」

ショージはそういうと、目の前の道を見つめた。

「私にまた、あの残酷な空の下で生きるというのか……？ また灰色だけの世界で、生きると？」

光る玉はなおも上下に揺れる。

「ショージ……同じ……空」

そういうと光る玉は高く舞い上がった。ショージは光の玉を追うように立ち上がると、天を仰いだ。まっすぐに空を見つめる。

「同じ……？」

ショージの目には灰色しか映らない。

彼は幼い頃両親と一緒に旅行中交通事故に遭い、両親を亡くした。そして彼はその時の事故が原因で色覚障害を負ったのだ。それ以来彼の目には花々の美しく咲き乱れる様子も、美味しい料理も、空の青も、みな灰色にしか見えなくなった。

だが、そんな彼にひとつだけ鮮やかに映る物があった。それは魂。靈魂だ。彼はこの世のものは皆灰色にしかみえないが、魂の姿とその色を見ることができた。

「同じ空？」

シヨージが太陽の眩しさに目を細めると、光の玉はゆらゆらと下りてきてまた、

「シヨージ」

と彼の名を呼んだ。光の玉が何を言いたいのかわからないシヨージは首を傾げた。

シヨージは青空が嫌いだ。それがどんなに青く美しいかシヨージは知っている。だが今のシヨージには決して見ることができないのだ。だからこそ、シヨージは灰色の世界に取り残された孤独を感じてしまう。他の人とは違う自分を感じてしまう。彼の目に鮮やかに映る魂達も、決して彼の元にとどまらない。魂は器がなければ長くこの世いられない。かならずあの世へと旅立ってしまう。

だからいつもシヨージは孤独だった。灰色の世界で、生きた人々と馴れ合うこともできず、彼の前を通り過ぎる鮮やかな人たちは、すぐに彼の前を去ってしまう。どこにも居場所がない。誰も一緒にいてくれない。世界と自分は隔てられている。シヨージはずっとそう感じてきたのだ。

「シヨージ、行く」

光る玉はぼんと弾むと、シヨージの背中を押した。

「おいおい」

危つく白い道に足を踏み入れそうになって、シヨージは慌てた。一歩でも入れば後戻りはできない。シヨージはあちらの世界に戻っ

てしまう。シヨージが全く前に進まないのを見た光の玉はついに怒り出したのか、大きく飛び跳ねるとコツンと彼の頭を叩いた。

「ズルイ」

光の玉がぼつりと言ったその言葉に、シヨージはハツとした。この小さな命は生まれ出ることなくあの世へと行かなければならないのだ。世界の何も知ることができぬまま、一度も大地を踏むことなく。きつと生きたかっただろう。どんな未来が待ち受けているのか分からなくても命は、生きるために産まれてくるのだ。

「すまない……」

シヨージが謝ると、光る玉はまたぼんと彼の背中を押した。どうやらそれは「行け」ということらしい。シヨージはついに光る玉に負けを認めた。ほんのちよっとしか生きていない命が、40年以上も生きてきた人間を負かすなどただ者ではない。さすがまゆりの子供だと、シヨージはため息を付いた。

「君は、あつちに行ったら英雄になれるぞ。なんせ二人分の命を救ったんだから」

そういうとシヨージは白い道に足を踏み入れた。

その瞬間、ぱつと辺りに音がうまれた。子供が笑う声、車の走る音、ブランコが揺れる音。音の洪水が、シヨージの耳に流れ込む。だがまだ音だけだ。公園にいる人たちの姿は見えない。

シヨージは深呼吸をすると、光る玉の方を振り返った。するとそこにはもう何もなく、シヨージの影だけがあった。

「もういちど、ちゃんとか」

シヨージがあのだに彷徨い混んだのは偶然だった。死者の通り道そこはシヨージの目には色鮮やかな人たちがたくさんいるキラキラした所だった。灰色しかない世界は寂しさだけを助長して決して彼を救ってくれない。だから彼はこの世から逃げ出して、あの誰もいない町にとどまっていたのだ。死者は通り過ぎるだけだったけれど、一瞬だけでも寂しいシヨージと話してくれた。それだけで、彼は満足だった。だが、

「私も、まゆりと同じだったと……そう言いたいのか？」

光から闇へと逃げたまゆり。この世から、誰もいない町へと逃げたシヨージ。

全く違う二人だけれど、同じように孤独を感じ寂しさに負けた。

「……そういうことか」

シヨージは光の玉が何を言いたかったのか、その時に分かった。

同じ空。

まゆりの生きる同じ空に帰れど、光の玉はそう言いたかったのだ。シヨージには灰色の空しか見えない。晴れも曇りも、同じにしか見えない。けれど、曇りでも雨でも晴天でも、この空は一つ。同じ一つの空だ。

たとえ一緒に歩めなくても、同じ空気を吸って、同じようにがむしゃらに生きたならシヨージはまゆりといっしょにいられる。決して一人ではないのだ。

「ただいま」

誰に言うでもなく、シヨージは呟いた。

都会の喧噪と、寂しい人々の群の中でシヨージは一人で生きなければならぬ。シヨージの目に映る灰色の空は、いつまでも晴れの青を見せてはくれない。

けれどもいつか。シヨージの「ただいま」という言葉は、誰かに迎えられる日が来るだろう。

なぜなら今まさにシヨージが呟いた言葉は、ただ一つのこの空に吸い込まれて、ひとりぼっちの誰かに雨を降らせたのだから。

晴れすぎた空は 嫌い

青いあなたは 私を独りぼっちにする

だから私は シガレットの煙で

あなたを 汚そうと 今日息を吐く

そして煙を 雨雲にかえて

涙を雨に 嘆きを雷にかえる

私の体は からっぽにかえて

あなたを泳ぐ 風になる

青すぎる孤独

そしたらもう 寂しくない
あなたの中に 私はあるから
あの青すぎる空も 怖くない

その雨が晴れたなら、空にはきくと虹がかかるだろう。

了

願 詩（後書き）

あとがき書き忘れてました（汗）

私の短編3つ「E_t」「再生」「母の畑」を合わせたような世界観の話です。まゆりがとても悲惨な設定だったためにR15にしました。あらすじを見て、二人のラブとか期待していた方、ごめんなさい（平謝り）感想などいただけるとうれしいです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4307d/>

青すぎる孤独

2009年3月24日10時21分発行